第 19 回講義　　2024 年 10 月 21 日

Quad をめぐるインドの多極外交

防衛大学校 人文社会科学群国際関係学科 教授　伊藤 融

はじめに

私は南アジアを専門に研究していますが、当初は全く注目されなかった地域ですが、近年とみにインドは重要な国だと認識されています。インドは良く分からない国だと言われていますが、これは今まで良く研究されなく情報が少なかったからです。現在、そのような地域、国を研究しています。

・ ロシアのウクライナ侵攻

先ず、二つのトピックスから話を進めたいと思います。一つはロシアのウクライナ侵攻で、これをめぐるインドの対応です。世界の国の中で日本を含めた西側の国々はロシアはけしからん国だと当然言います。日本は米、豪、インドと共に Quad という枠組みを形成していますが、インドを除いてロシアを明確に非難しています。インドは絶対にロシアを非難しません。それどころか、インドは西側がおこなっているロシアに対する経済制裁に参加しないで、ロシア産の原油を爆買いしています。

もともと、インドはロシアの原油を買っていませんでした。それは当然で地理的にロシアは遠く輸送費が掛かります。中東から購入したほうが遥かに合理的です。しかし、ロシアに対する経済制裁でロシアの原油をどの国も買わなくなり、ロシアは大幅に値下げをしました。従って、インドはロシアの原油を大量に購入しています。それだけでなく、インドはロシア産の原油を精製して商品にして外国に売っています。さらには肥料もロシアから大量に買っています。また、日本政府が国連の要請でウクライナ避難民の救援のために物資を輸送するための自衛隊の輸送機を備蓄倉庫のあるインドのムンバイに行こうとしたら断られました。これは日本からするとインドは何を考えているのか全く分かりません。

・「今は戦争の時代ではない」発言

それでは、インドはロシアの味方なのかというとそうでもありません。インドのモディ首相はメディアが沢山いる前でロシアのプーチン大統領に「ウクライナ侵攻などしている場合ではない」と苦言を呈しました。（左図参照）しかし、だからと言ってロシア非難を公の場で行ったという訳でもありません。さらに、今年行った G20 ニューデリーサミットの場でもこれを成功させるためにインドは「自分たちはグローバルサウスだ」と強調しました。つまり途上国だという意味です。

これは何かというと、ウクライナ侵攻の結果、我々途上国が苦しんでいるという経済的な影響の方に目を向けさせようとする概念でグローバルサウスという言葉を使い始めました。Quad といって日米豪はインドを仲間に引き入れようとしているのにインドは一向にこちらを向きません。インドはふらついているとバイデン大統領は不満を表明しました。

・ G20 議長国としての「グローバル・サウス」概念の強調

先月の G20 ニューデリーサミットでインドはこれだけ大規模な先進国を含めた国際会議を行うのは初めてなので大変な熱の入れようでした。事前にはこのサミットは上手くゆかないとの声もありましたので、首脳宣言は出せないと思われていましたが、モディ首相は二日間の会議の初日の午後 3 時頃にいきなり首脳宣言を発表しました。日本の岸田首相やバイデン大統領、西側先進国の首相は反対するどころか拍手までしてました。

・ 消えた「ロシア非難」

今回のサミットと去年(インドネシアのバリで開催)との首脳宣言の違いは何かというと、昨年はロシアのウクライナ侵攻を批判する言葉が宣言に入っていました。それでも、ロシア、中国は合意していました。ところが、この一年間で状況が変わって、ロシアや中国は批判する言葉は絶対に認めない

と言ってました。そこでインドのモディ首相が出した案はロシアの非難どころか全くロシアという文字は入っていません。そのような宣言文でした。ウクライナは我々を見捨てたのかと怒りました。これを日本を含めた西側諸国は認めたということです。何で西側は受け入れたのか様々な報道を総合すると、会議が開かれる前夜にインドの交渉担当者のシェルパが、これが最終案だと言って去年の G20 の議長国のインドネシア、来年の議長国のブラジル、再来年の議長国である南アフリカ、どの国も西側諸国ではありませんし、ロシア、中国に近いわけでもありません。そこがミソですが、この 4 カ国で共同提案として西側諸国に突き付けたわけです。そして異論があればモディ首相に直接言って欲しいと言って午後 3 時まで待ったが異論がなかったので共同宣言として発表しました。これを G7 議長国の日本も仲介したとされています。それだけ西側先進国がウクライナに対する裏切り行為と捉えられてもしょうがない宣言でもインドのモディ首相のメンツを潰すわけにはいかないということです。それだけインドは重要な国だということです。

１．価値の共有という幻想

なぜインドは重要な国なのか。よく言われるのは中国の脅威が大きくなるにつれて、インドは中国と違って我々西側先進国と同じ価値を共有しているからだということです。岸田首相も日本と民主主義、人権、法の支配、などこのような価値を共有しているということですが、果たして本当にそうだろうか。価値の共有の時によく言われるのがインドが民主主義国だということです。

・　世界最大の民主主義国

インドは世界最大の民主主義国だと言われます。この世界最大とは人口規模のことです。インドの人口は今年中国を抜いて世界一になりました。有権者数が前回の総選挙の時に 9 億人、これは 18 歳以上の男女に与えられているので 18 歳以下の人口は 5 億人います。この 9 億人規模で選挙を行って政権交代が起こる可能性のある国はインドしかありません。その意味で世界最大の民主主義国だという言い方をします。また、インドはアジア、東アジア、東南アジア、西アジア、中央アジアを全部含んだ大きなアジアですが、そのアジアの中で第二次世界大戦が終わってから一度もクーデターが起こったことがなく、王制にもなったことがない国は三つしかありません。インド、日本、スリランカです。かつて、東南アジアの多くの国、韓国もですが、開発独裁という政治体制を取ったことがあります。開発が最優先で、先ずは豊かになることが大切で、そのためには強いリーダーが必要でそのためには一定の人権の抑圧も仕方がないという考え方です。豊かになると中産階級が出てきて民主化運動が起こるのが自然の流れです。

・開発独裁もクーデターもなし

インドは 1947 年にあの有名なガンジーの独立闘争から独立したわけですが、その時代から今迄、軍事政権や王制やクーデターも起こったことがありません。しかも、国レベル、連邦レベル、州のレベル、村のレベル全てが選挙によって政治が動くシステムを維持してきました。しかも選挙の結果にクレームをつけるようなことは一回もなくそのような意味での民主主義が確立されてきました。上図にいくつか写真があります。新聞記事か抜粋しました

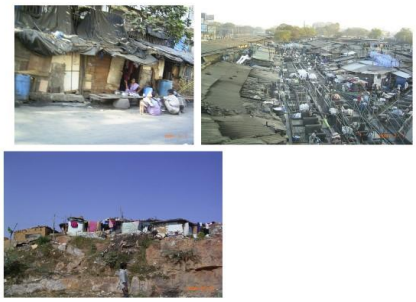
が、象の写真は現代で道路さえないような山奥にも選挙を行うために選挙管理委員会の人が象に乗って選挙用の機材を運んでいます。上側の写真は選挙戦の写真です。また、今インドでは電子式投票機を使い紙は使っていません。右側の写真は夫々のボタンにシンボルマークの絵が描いてあります。選挙管理委員会がそれぞれの政党にシンボルマークを付けています。与党のモディ首相率いるインド人民党 BJP のシンボルマークは蓮の花です。インドの識字率は今 8 割を超えていると思いますが、2 割の人達は読み書き出来ません。そのような人々が投票するには字が読めなくてもシンボルマークで投票できる訳です。こうして徹底的に民主主義が実践されてきました。

・モディ政権下で進む「民主主義の後退」ヒンドゥー多数派主義

ところが、私の経験上このような話をすると必ず、インドのカースト制の問題や女性差別の問題、貧困の問題など、色んな事が指摘されます。その通りです。しかし、これは共存できるものとして考えられてきました。インドでは政治に参加することが民主主義だと考えられてきました。しかし、少しずつ変わってきています。それはカースト制度の外側に居る最も差別されている人達の為の政党が出て来て、自分たちの暮らしを良くするために投票するという行動様式も出てきています。**左図**の 3 枚の写真は私が撮ったものですが、ムンバイであれニューデリーであれ街角にでればこのようなスラムが広がっていますが、このような状況と世界最大の民主主義国というのは、一見すると矛盾していると思うかもしれませんが、こういうものが共存してきたことがインドだということです。ところが、今のモディ政権で問題になっているのはそのような制度としての最低限の民主主義が危なくなってきているとの批判が特に欧米から出てきています。これは民主主義の後退とかヒンドゥー多数派主義と言われています。今のモディ政権が目指しているのはヒンドゥー教徒の国を作るというような動きです。

ところが…
無数の社会的矛盾
カースト、女性差別、貧困・格差 etc.

→「制度」としての
「民主主義」

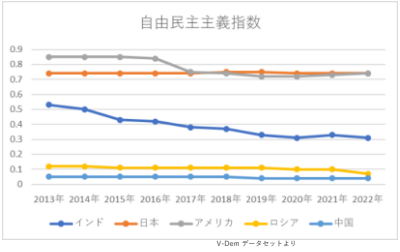


インドはヒンドゥー教徒の国だと思いがちですが違います。インドの多数派は 80%近くのヒンドゥー教徒ですが国の宗教はありません。周りのパキスタンはイスラム教が国の宗教です。イギリスから分離独立した時にパキスタンはイスラム教徒の国を造ると言って出ていきました。対してガンジーが目指したのは宗教に関わりなく暮らせる国です。これを「セキュラリズム」と言います。政教分離主義です。そういう国がインドの国是で憲法にも書いてあります。8 割近くがヒンドゥー教でも、残りの 2 割はムスリム(イスラム教徒)だったりキリスト教徒や仏教徒もいます。一番多い少数教徒はムスリムで 15%位います。たった 15%でも 14 億人の 15%だから 2 億人位います。中東のどの国よりもイスラム教徒が多い国です。この様な状況下でヒンドゥー教徒の国を造るのは危険です。

今、それを変えてヒンドゥー教徒の国を造ろうという動きが広がっています。例えば、カシミールというイスラム教徒の多い地域の自治権を撤廃したり、市民権法を改正するとかの動きがあります。市民権法改正とはインドに入ってくる違法移民に市民権を与えることですが、但しムスリム以外です。これに対するデモがものすごく広がって 2019 年に安倍首相がインドを訪問する予定がキャンセルされました。そのようなモディ首相に対して 8 割のヒンドゥー教徒達の相当部分がモディ首相を高く支持しています。

・「選挙民主主義」から「選挙権威主義」への格下げ

そうした状況を欧米のシンクタンクや調査機関がどの様に評価しているかです。有名なアメリカのフリーダムハウスの調査によるとインドの「自由度」はかなり下がってきています。制度としての民主主義で、この選挙さえ



・「選挙民主主義」から「選挙権威主義」への格下げ

怪しくなってきており、V-dem は「選挙権威主義」だと批判しています。また、民主主義で重要なのはメディアが自由に行動できるかですが、「このメディアの自由度」も相当怪しくて 2023 年度のデータによると 180 カ国中の 161 番目まで下がりました。今、インドの報道の自由は大変危険な状況に置かれています。

「宗教の自由」に関してはアメリカの政府機関の指定では中国などと一緒の「特に懸念される国」のグループに入っており、宗教に自由はないとみられています。また、「経済活動の自由度」は企業の人達からは経済活動がしにくい国とみられています。規制が沢山あり中国の方がましだとみられています。

独自の民主主義観
2021年12月第1回　民主主義サミット
世界最大の民主主義国を代表して、このサミットに出席するのを誇りに思います。民主主義の精神は私たちの文明的エートスに不可欠なものです。インドでは、２５００年も前から、リッチャヴィ族や釈迦族のように選挙にもとづく共和制の都市国家が栄えてきました。同様の民主主義の精神は、民主的参加の原則を記した10世紀の「ウッタルマルー」の碑文にもみることができます。このきわめて民主主義的な精神とエートスゆえに、古代インドは最も繁栄した地のひとつとなったのです。数世紀に及ぶ植民地支配をもってしても、インド人の民主主義の精神が抑圧されることはありませんでした。
(中略)
複数政党による選挙、独立した司法、自由なメディアといった構造的特性は、民主主義の重要な装置です。しかしながら、民主主義の基本的な力は、私たちの市民、私たちの社会に内在する精神とエートスなのであります。民主主義とは人民の、人民による、人民のために、というだけでなく、人民とともに、そして人民のなかに存在するものでもあります。
民主主義の発展には、世界各地でさまざまな道があります。私たちは互いから多くのことを学ぶことができるのです。

・独自の民主主義観

インドは自分たちこそが自由主義の元祖だと言っています。**左図**はモディ首相の発言ですが、アメリカのバイデンが開いた民主主義サミットでの発言で、民主主義は「精神」とか「文化的エートス」だと言ってます。インド独自の民主主義があると言ってます。今年の民主主義サミットでも「古代インド時代からインドは民主主義で民主主義の母だ」と言っています。

民主主義サミットではインドは共同声明には署名していますが、沢山留保を付けました。例えば、ロシア非難の部分は全部呑まない。インターネットの自由もインドはノーです。今騒動が起きているマニプール州ではインターネットを遮断して通信できないようにしています。こうしたことを見ると必ずしも我々と価値を共有しているわけではありません。特にモディ政権の下では乖離が広がってます。

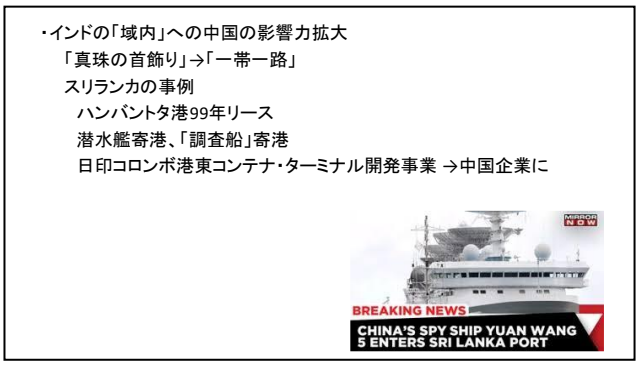
2. 利益の共有という幻想

・インドの対中脅威認識

次に「利益の共有」です。価値の共有は無いかもしれないが、中国の脅威に対しては対抗するという点では我々と利益を共有すると言われます。これに対する私の結論を先に申し上げるなら、ある部分では Yes. だが、ある部分では No. だということです。

まず、利益を共有する点からいきます。インドは、我々が中国に対して共有認識を抱いているのと同じか、それ以上に実は昔から中国を脅威だと思っています。1962 年にインドと中国は国境戦争を戦ってインドの方が負けてるんです。負けた側は絶対に忘れません。未だに中国に対して自分たちが劣っていると認識しています。日本と違ってインドは中国との間で抱えている国境戦争とか中国の攻勢は海ではなく陸です。陸の方が遥かに厳しいです。我々は中国と海を介して隔てているのである程度楽です。インドは中国と陸続きです。陸で接していてそこに人が住んでいます。インドと中国の国境は確定しなくて殆ど実効支配線状態です。インドも中国もそれぞれ実効支配地域が違いますから当然重なる部分ができてここにそれぞれ踏み込んでしまい緊張が走ります。そのようなことが何回も起こって 2020 年にガルワン衝突事件が起こり、インド側が中国側に対して強く不満を表した事件です。インドが実効支配しているラダック地方と中国が実効支配しているカシミールの一部のアクサイシンのガルワン渓谷で互いに踏み込んで遭遇しました。実はこれまで 45 年間で同様なことが起きましたが、誰も死亡者がいないなんて不思議だと思うかもしれません。“これはお互いの実効支配の認知が違うからしょうがないね、まあ良い事にしよう。”で銃などは持ち込まないようにしようで終わってました。但し、ガルワン渓谷では道が細いため出合った時に喧嘩になりインド人が渓谷に落とされ死んだということになっています。このことによりインドの中では非常に反中感情が高まりました。これにより実効支配地域全域でインドと中国のにらみ合いが続きまだ解消されていません。

・インドの「域内」への中国の影響力拡大



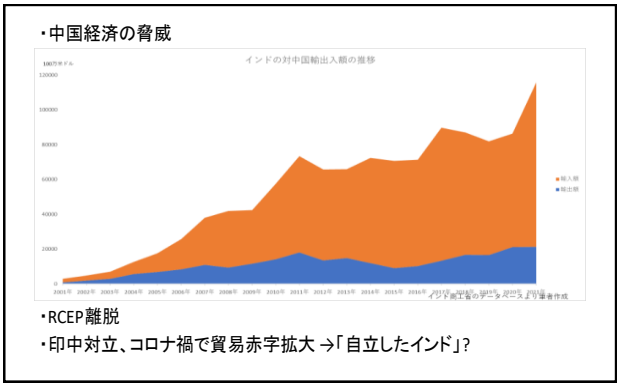
私は二カ月前の夏にラダックに行ってきて中国との国境付近まで行きましたが、インド軍が山の頂上付近まで見張っています。5000 メートルを超える所ですから冬になったら大変です。ただし、インドの国民感情はものすごく燃え上がっていて中国製のアプリケーションや中国製品、中国の投資をボイコットする動きが広がっています。この様な衝突以外にインドが懸念しているのは、インドは伝統的に大国で南アジアは自分たちの庭だと思っている所があります。そこに中国が影響力を行使し始めています。例えば有名なスリランカの事例です。スリランカのハンバントタという港は中国企業に 99 年間にわたるリース契約で譲渡せざるをえなくなりました。そのような経済的な影響力が徐々に政治的な外交的な影響力の浸透にも繋がる訳です。中国の船や潜水艦がどんどんスリランカに入ってきます。スリランカに対して中国船を入れるなとプレッシャーをかけていますが、これだけスリランカも経済的に中国に依存していると中国に対してノーと言えない状況だと思います。

日本とインドと一緒にやろうとしたコロンボの開発計画も中国企業に持っていかれました。インドは焦ります。スリランカはインドの隣の島です。中国とは大変な距離があります。しかし、中国の経済的、政治的、軍事的影響力が強まってくるとインドの警戒感は強くなります。さらに敵国のパキスタンと中国が結びつき始めています。中パ経済海路という構想があります。これは中国の新疆ウイグル自治区からパキスタンが実効支配するカシミールを通って中国が経営権を持っているグワダルの港を結びます。中国がこれを作ればマラッカを通らなくても原油とか色んな物資を中東からのルートの確保ができます。中国の戦略的プロジェクトです。インドにとってみればこれは主権の問題で絶対認められません。これは北方領土に中国とロシアが共同で開発事業をするようなものです。これを認めてしまえば中国人民解放軍はいつでもパキスタンを助けるために軍隊を運ぶことができるようになります。それは絶対阻止したいというのがインドの思惑です。

・コロナ禍でのワクチン・マイトリの挫折

これに対してインドは巻き返しを図りました。コロナ禍の中でワクチンただで配りますプロジェクトです。インドは製薬が得意です。アストラゼネカ製のワクチンを作り国民が打ち終わってないのに周辺国にもタダで配りました。そのうちに感染第２波が起こりアストラゼネカ製のワクチンが配れなくなり、アストラゼネカ製のワクチンは２回打たないと効果がないので話になりません。そこで結局中国のワクチンに頼ることになりました。さらにインドはインド洋の色んな島に軍事基地を造ろうとしましたが、結論から言えば上手くいっていません。地元住民の反対を受けました。地元住民は中国の影響下にも入りたくないけれどインドの影響下にももっと入りたくないと思っています。そうした中で中国はインドの大国化の野望に対して最大の壁になっています。例えば、インドは国連安全保障常任理事国になりたいと思っても必ず中国がブロックします。

・中国経済の脅威



最初はモディ政権は中国との貿易を活発化してインドを飛躍させようとしましたが実態は全然違いました。**左図**を参考にすると今世紀の初めは中国との貿易はほゞゼロです。その後どんどん伸びて今やインドにとって中国は貿易の最大相手国になりました。しかし、実態はインドは輸入ばかりでインド製品が中国製品に駆逐されます。だから安倍首相はモディ首相に RCEP に入れようと頑張ったが出ていきました。インドにとって RCEP を結ぶことは中

国と自由貿易協定を結ぶことになるので中国製品がものすごく入ることになるので、結びませんでした。インドは脱中国化を図りたい、特に中国との国境問題が先鋭化する中で何とかしたいと思ってはいるが、2020 年のコロナ下で中国との貿易が増えています。コロナ感染下でインドの医療崩壊状態で結局中国の医療製品に頼らざる得なくなってます。メイク・イン・インディアを目指しても部品を全て外から購入してインドでは組み立てるだけというのが現状です。そこで何とか、自立したインドにしたいと今焦っています。この様なところでは我々とインドは対中国という所では利益は一致しています。

確かに、インドも日本もインド洋、南シナ海では中国の脅威は認識しています。そこでインドも Quad に期待して何とか自分たちの庭を取り戻したいと思っています。

・地政学的な利益のズレ

海洋部分では日・米・豪は協力できると言ってますが、中国との問題は陸の部分で、国境で最も精鋭化した問題になっています。さらに、パキスタンとの国境問題もあり、その向こう側のアフガニスタン、イラン、ミャンマーとかの国が重要なパートナーです。ところが、パキスタンは中国との結びつきを強化しているし､イランはトランプ政権以降経済制裁が復活してインドは原油を買えなくなり、ミャンマーはクーデターが起こり軍事政権となり欧米は付き合うことを良しとしません。インドは海では友好国が沢山いるのに陸では四面楚歌になってます。そうするともうロシアしかありません。ロシアはソ連時代からの友好国です。ただ、インドは安心しているわけではなく、ウクライナ侵攻が長引けばロシアは中国に近づくのでさらに弱体化します。インドにとって最悪のシナリオです。この部分が我々と利益を共有しない部分です。

・先進国vs途上国・新興国=グローバルサウスの溝
WTOでの自由化や知的所有権をめぐる対立
インド太平洋経済枠組み(IPEF)貿易分野への参加留保
IMF、世界銀行での中国との共闘
BRICS銀行、アジアインフラ投資銀行への参加
国連気候変動枠組条約締約国会議(COP)での途上国の権利主張
↓
中国は敵ではなく、協調すべきパートナー
→しかし、習近平体制下の中国による軍事攻勢で協調は困難に

・先進国 vs 途上国・新興国=グローバルサウスの溝

もう一つは意外と日本人が理解してない部分ですが、我々は先進国だけれどインドは途上国・新興国・グローバルサウスだということです。実はインドはよく国際会議などでちゃぶ台をひっくり返すような議論をします。WTO などで最後に合意をぶっ壊す。つまり、途上国には自分たちに有利な経済秩序を作りたいという思いがあります。先進国とは全く相容れません。他方で、中国とは利益が一致します。だけれども、中国は今習近平が軍事的圧力を掛けてくるので協調しようにもできません。というのがインドの今の苦しい部分です。

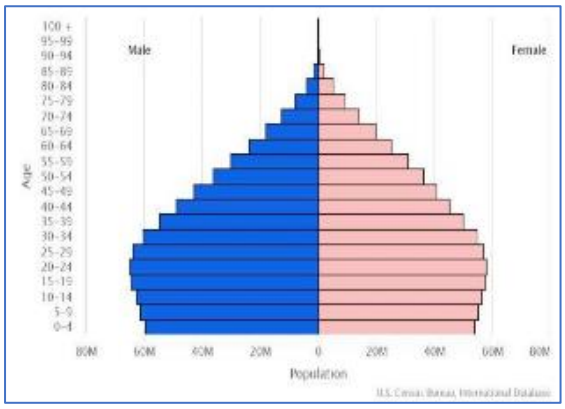
３．インドの実力の現在と未来

前半でインドと我々西側先進国とは思っているほど価値も利益もそれほど一致はしないということをお話ししました。では、そんな国と別に付き合わなくても良いのではないか、との声が出てくるかもしれませんが、実はそんな選択肢はありません。というのが私の立場です。

南アジア各国の主要データ					
	面積(平方キロ)	人口(人)	GDP(10億ドル)	軍事費(10億ドル)	総兵力数(人)
インド	3,287,263	1,389,637,446	3176.30	65.10	1,460,350
パキスタン	796,095	242,923,845	348.23	10.40	651,800
バングラデシュ	148,460	165,650,475	416.27	4.06	163,050
ネパール	147,181	30,666,598	35.85	0.41	96,600
ブータン	38,394	867,775	2.44	n.a	n.a
スリランカ	65,610	23,187,516	88.98	1.53	255,100
モルディブ	298	390,164	5.20	n.a	n.a
アフガニスタン	652,230	38,346,720	n.a	1.88	165,000
	面積と人口: *CIA Fact Book*(2022年)				
	GDP: IMF(2021年) アフガニスタンは政変のため不明				
	軍事費と総兵力数:*Military Balance 2022*　ブータン、モルディブは記載なし				

インドはそれだけ重要な国であることは間違いありません。地理的にはインドは我々にとって重要なシーレーン、海上交通路の要所に突き出ている国です。もしインドが中国化すれば我々にとって海上交通路を脅かされることになります。実はインドは南アジアの国の中ではずば抜けた存在であることを指摘しておきたいと思います。

インドは地図をよく見ると南アジア諸国は互いに接してなくインドのみが各国と接しています。インドを通らないと互いに行き来出来ません。こんな地域は他にありません。**上図**を見ると経済力や

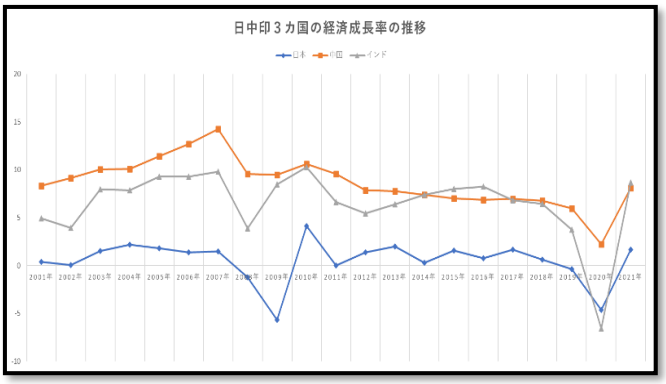


軍事力もインドが桁違いです。これが南アジアではインドが中心だと言えます。また、パキスタンもバングラディシュも世界から見るとそれなりに大きな国です。人口規模を見るとインドが世界一位ですが、パキスタンやバングラディシュも世界 Top 10 に入っています。それだけ大きな地域が南アジアですが、その中で圧倒的に一番がインドです。

しかもインドの強みは若年層が多いということです。**左図**はインドの人口ピラミッドで富士山型と言われています。日本の平均年齢は 48 歳位で、中国もそれに近づいて少子高齢化に入っています。30 年前は中国も左図のような人口ピラミッドでした。20-24 歳が一番多く飛び出しています。男性だけで 6000 万人います。女性と併せたら 1 億 2000 万人で日本の人口と同じです。これが 20 年後になれば働き盛りになり、お金も使ってくれます。これが人口ピラミッドの中で人口ボーナスによる成長が見込めると言われていますこれが 2040 年代半ばころまで続くだろうというのが一般的な見方です。

・持続的経済成長率

このことは最近の経済成長率を見ても伺えます。(**右図**：経済成長率) 日本は一番下の線で、中国が一番上、インドが真中の線です。
2001 年か 2010 年の 10 年間を見るとインドは中国とだいぶ離れているが、その後はインド、中国は拮抗しています。それは、もう中国の人口ボーナスは終わりに近づき、インドはこれからだということです。これからは確実にインドは伸びていきます。



・GDP

GDP のランキングは 2021 年ではインドは 6 位ですが 2022 年ではイギリスを抜き第 5 位になりました。IMF の予測では 2027 年には日本を抜いて第 3 位の経済大国になると言われています。

・軍事費

次は軍事費ですが、ずば抜けている米中は 1 位、2 位ですがインドは 3 位です。2001 年時は日本がインドをかなりオーバーしていたが、今では大分差を付けられています。しかし、インドが急に軍事化したと言えるかというと、インドの GDP に占める割合は変わっていませんので急に軍事費が増えたわけではありません。GDP が増えたから軍事費も増えたことになります。

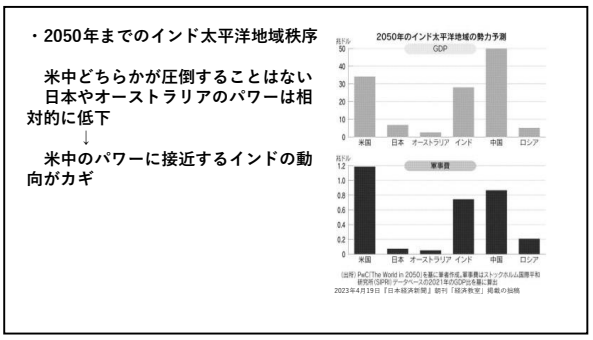
・豊富なソフト・パワー

インドの強みは経済力、軍事力だけではなくソフト・パワー力にあります。色々ありますが、例えばタージマハール、インド料理、映画産業、今年はやった RRR、ヨガなどがインドの魅力になります。

また、モディ首相はガンジーをインドの資産として利用しています。こういった物がインドのパワーになっています。調査機関が調べた予測ですが、西側先進国の米、日、豪と印、権威主義国の中、ロの GDP の長期予想は 2037 年のインドの GDP は大分大きくなっていて、インドがどちら側につくのかでインド、太平洋地域の経済秩序が決まってくるということで、インドが鍵を握っています。

・2050 年までのインド太平洋地域秩序

右図は 2050 年のインド太平洋地域の勢力秩序です。インドが大分中国に迫ってきます。米中のどちらかが圧倒する存在ではないと思います。その中でインドは相当のカギを握ると思います。軍事費ではインドが中国に肉薄します。そうなると日本やオーストラリアの力は相対的にこれから人口も減るので低下していく中で、インドをどのように味方につけるかがカギを握ることになります。



だからこそ、モディ首相の G20 の発言に繋がってきます。インドを敵に回したら大変なことになることが分かっているからどの首脳もモディ首相の乱暴なやり方に異論を唱えなかったのです。

４．考えられるシナリオ

ではインドがこれからどう動くのか。考えられるシナリオは 3 つあります。

4.考えられるシナリオ

(1)日米豪印同盟
現状のクアッド=「数あるグループの1つに過ぎない」
「インドは同盟は回避する」
中国が本格的に攻勢をかけてきた場合はどうか？
軍事費増でも間に合わない
ロシアの弱体化・中国依存
→クアッドの同盟化を望む議論
インドの躊躇
日米豪の覚悟、「巻き込まれ」のリスク

・日米豪印同盟

１つ目：はインドが我々西側に近寄ってくることです。有難いシナリオだが、まずこれはありませんし、インドも望みません。インドは同盟は結びません。なぜか、ながい植民地支配を受けてきて、でも自分たちは大国意識があります。だからダメです。同盟を結んでしますと、大国の同盟の傘下に入ると物が言えなくなる。自分たちの独立が損なわれると考えるわけです。インド人に言わせると日本のような“アメリカと同盟を結びよく独立を守れるね、信じられない”といいます。また、特定の国と同盟を結ばないと色んな国から利益を引き出せるとも言います。だから今の外務大臣は Quad は同盟ではないと明確に言ってます。数あるグループ、QUAD、BRICS、SCO、ロシアとか中国が加盟している、そのようなグループの One of Them だと言ってます。ただ、全くあり得ないことではなくて、今、中国がインドに軍事攻勢を掛けたら、多分勝てそうもないので、QUAD に頼らざるえないということはあり得ます。しかし、インドは躊躇します。私の考えはそうなってもやせ我慢して QUAD の同盟化は望まないと思います。我々の方も本当に同盟化する方が得なのか、そもそもその覚悟があるのか、ということです。我々は中国の海洋進出には懸念を持ってますが陸上のインドと中国の国境問題に巻き込まれたいと思いますか、巻き込まれる覚悟がありますか、ということです。同盟はリスクを伴うので我々も躊躇する所です。

(2) 印中ロ同盟
米国の一極支配、単独行動主義、国家主権侵害→RICの絆
BRICS、上海協力機構(SCO)など多層的に連携

「民主主義の後退」に伴う諸問題への西側の批判
→インドが中ロなどとの連携を強化する可能性
中国の「ジュニア・パートナー」と化すことを受け入れるか

・印中ロ同盟

２つ目：は、これは最も避けたいシナリオですが、インドが中国やロシア側に近づくことです。かつて、ブッシュジュニア政権の時にアメリカのイラク戦争にはインドはノーでした。アメリカが国連を無視して単独で行動する、人権の理由にして国家主権を侵害する。こういうのはロシア、インド、チャイナは結びつきます。RIC という枠組みがあります。今でも定期的に外相会談をおこなっています。それだけでなく BRICS もあります。上海協力機構(SCO)。インドのモディ首相は QUAD よりも RIC、BRICS、SCO みたいな方が定例化されているのでいやでも習近平と年に 2－3 回会いま

す。だからこの可能性が全くないわけではありません。とりわけインドでは民主主義が後退しているので西側が批判します。だけどここもインドは躊躇します。中国と組むということは軍門に下ると同じで、誇り高いインドとしては絶対に避けたいところです。従って中国は今のままが一番良いと思っています。

・戦略的自律性と「多同盟」の維持

左図にある様にインド外交のキーワードは「戦略的自律性」と「多同盟(Multi Alignment)」です。戦略的自立とは特定の国との同盟に依存しないで自分たちのフリーハンドで行動できる領域を増やしておくことで、多同盟は色んな国と付き合う、全方向で付き合うことで、これが得策だということです。アメリカとは色んな部分で利害は一致しますが、国際政治の秩序とか国際経済の秩序をどうするか、の所では中国の方が馬が合います。ロシアとはほぼ一致します。つまり違う相手から違う利益を引き出す、このような発想がインド外交の基本戦でこれを続けたいと思っています。これが可能になっているのはインドはどの国からも望まれる存在になっていることが条件です。西側は確実にそう思ってます。世界第 5 位の経済大国で世界第 3 位の軍事大国であり、将来的にはものすごく大きな存在になることが確実なインドは一応は民主主義国なので西側に引き寄せたいと思うのは当然です。ロシアもこれからも兵器や原油を買って欲しいのでインドを必要としてます。しかし、中国はインドを必要としているのか？　習近平はインドが QUAD に入るならどうぞというような強硬な姿勢で臨んでいます。今の習近平はアメリカと喧嘩しながらインドとも日本とも喧嘩をしています。いわゆる戦狼外交です。それだけ自信をつけています。だからインドは中国との問題をマネジメントして長引かせて戦争までもっていきたくないと思っています。どうにか時間を稼いで 2050 年の状況になれば、インドの力がだいぶ中国に近づくことになるので、これがインドの基本戦略になります。

(3)戦略的自律性と「多同盟」の維持

インドからみた米中ロの関係イメージ

問題領域	アメリカ	中国	ロシア
国内政治的価値(民主主義、多様性)	○	×	△
国際政治秩序(多極世界、主権尊重)	×	○	○
国際経済秩序(WTO、気候変動問題等)	×	○	△
政治大国化(国連安保理常任理事国、NSG入り等)	○	×	◎
地域外交・安保(カシミール、アフパク、中国等)	○	×	◎
軍事協力(兵器輸入・開発、本格的な合同演習)	○	×	○
貿易・投資	◎	○	×
エネルギー・資源	○	×	○

記号注:
◎親和性・協力関係がとくに強い　○基本的に親和性・協力関係が強い
△どちらともいえない　×基本的に疎遠ないし競争・対立関係が強い

5. インドとどう向き合うべきか

価値と利益の共有は私から見れば幻想だと思います。利益を共有している所で協力するというのがインド基本的発想なので日本もその様な向き合い方をすべきだと思います。

・非軍事分野での協力推進、経済安全保障協力への期待

では、日本は何ができるか、日本は軍事的協力は限界があります。インドが日本に期待しているのは経済で非軍事分野での協力です。最近では経済安全保障です。中国の一帯一路に対して、日本、アメリカともっと協力して別のインフラプロジェクトを期待しています。さらに、中国に依存しない別のサプライチェーンを作りたい。アメリカは既に動いていて、先の米印首脳会談でインドの国産戦闘機のエンジンを GE がインドで製造する。半導体工場もアメリカがインドで造るなど中国に頼らないサプライチェーンの構築を既に始めてます。

5.インドとどう向き合うべきか

・価値と利益の共有幻想からの脱却
→実利に基づく協調
・非軍事分野での協力推進、経済安全保障協力への期待
質の高いコネクティヴィティ・インフラ
サプライチェーン強靭化
周辺国における債務問題への対応
・可能な地で、特定の分野で必要不可欠な存在になる

三つめは、スリランカの問題で IMF が助けるとのことで合意しましたが、中国による債務の罠、これに対応する協力、こういった所が日本に期待している所です。また、インドは多様な社会なので日本が入れるところで特定の得意分野でインドにとって不可欠な存在になっておくこと必要だと思われます。ただ問題は価値をめぐる問題への対応です。この点では欧米と日本は大分温度差があります。日本ではインドの人権の問題をメディアは殆ど報道しておりません。

・英 BBC ドキュメンタリー「インド・モディ問題」(2023 年 2 月)

今年になって BBC が「インド・モディ問題」という特番を組みました。20 年前にモディ首相がムスリムの虐殺に係ったかの疑惑があります。これに対してインドの外務省の報道官がこれは「プロパガ

ンダであり、植民地主義的思考だ」と言って国内放映やSNSのUploadを全て禁止しました。さらに野党の指導者、ラフル・ガンディーの議員資格はく奪をしました。これに対して欧米では強く批判してますが、岸田首相は３月にインドで「インドは世界最大の民主主義国である。また、選挙を通じて代表者を決めており、議論を通じて政策を決めていることは共通している。地球上には色んな価値観、文化があり、それは完全理解しえないってことは分かっている。国際社会地域が力と威圧とは無縁で自由と法とを重んじる場となることを望んでいる。」と言ってインドを取り込もうとしています。これが岸田首相の立場です。

・国内問題の傍観は賢明か?

これは賢明な方法だと思えます。しかし、全く触れなくて良いのかは中・長期的には疑問です。インドの現状を放置して、自由や民主主義の理念から外れて行くことは望ましいのか？そんな国と連携して中国やロシアに対して牽制効果があるのか？　もう一つは、今企業も社会的責任を取られます。そこでビジネスをするのに人権とか民主主義とか法の支配は守られているのかを株主に説明することが必要です。これがインドでビジネスをするリスクになります。経済的な関与が深まってゆき、インドで仕事をする場合に株主に対してもインドの人権問題も説明する必要があります。民主主義が確立していることを相手に理解して貰う。ここが変化を生む可能性に繋がると思っています。

【質疑応答】

Q：インドの教育レベルはどの程度ですか。また、28州程ありますが公用語はありますか。

A：二極化しています。ハイレベルな教育は非常に高いです。例えばインド工科大学(IIT)は最難関な大学で卒業生は世界中で活躍しています。一方、製造業につく人たちの教育は充分ではありません。後は、読み書きがどうにかできるレベルの人たちが圧倒的に多くいます。つまり、工場で物を作る場合、リーダーは沢山いますが、物を作るレベルの人が少なく、掃除する人は沢山いるというのが現状です。製造業を伸ばすには大学の大衆化(40-50%の人が大学に行く)が必要ですが、兆しはあり、新しい私立大学が沢山出来つつあります。

公用語は実質的にはヒンディー語と英語です。ただ全員ではなく、ヒンディー語は聞けばわかる程度にはなってきています。但し、それぞれの州で公用語が認められています。

Q：インド人のアイデンティティーはどのようになってますか。歴史観はありますか。

また、2007年頃から国民党の支持が急落したが原因は？

A：インドは多民族国家だしカースト制度で分断されてます。その国家を初めてまとめたのはガンジーです。その当時はイギリスという敵がいてインド人というまとまりがあったと思います。また、今はインドが飛躍しているという想像の共同体という概念が芽生えてきました。つまり、メディアを通してインドという国がどの様な国か、例えば世界5位の経済大国になった、独自の力で月面着陸したとか、このようなニュースをみんなが見て民族を超えてインドというものを体感できるようになったことが大きいと思います。

2014年にモディ首相が国民会議派に勝ったわけですが、リーマンショック後の世界経済の低迷で閉塞感が漂い、この理由は国民会議派の政策の失敗だとモディ首相率いるBJPが盛んに訴えそれが勝利に結びつきました。もう一つは国民会議派の後継者問題でガンジー家が牛耳ってきました。インド国民はガンジー家に頼らざる負えなかった。対してモディ首相はお茶売りの少年からの叩き上げです。そこが貧しいインド国民のハートをつかみました。

Q：インド国内の先端技術開発はどの程度ですか。

A：それは簡単な話で、インドはジェネリックが得意だという話をしましたが、先端技術で自分たちで開発する所は遅れています。そこまで研究投資ができないのが現状です。それを西側が支援しようとしています。先端技術開発をインドで共同開発してゆこうという動きが出てきてます。インドは技術移転を望んでいます。例えばGE製のエンジンをインドで造ることです。単にインドで組み立てるのではなく最終的にはインドに技術を移転してもらう。そうすることでインドは先端技術を

手に入れることを望んでいます。今、アメリカやフランスが先端技術の移転を強力にすすめています。

Q：最近モディ首相がかなり独裁的で民主主義の危機だと思いますが、先生の見解は如何ですか。

A：インドは中国とは違い最低限の歯止めはかかると思います。民主的な憲法は残っていてそれを基に司法が判断します。ラフル・ガンディの件もモディ政権は明らかに議員資格を剥奪しようとしたが、最高裁はノーでした。彼は議員として戻ってきて、国民の同情をかって支持が集まってます。今回の件で生き返った気がします。来年の春の総選挙で野党をまとめて反モディ政権で結集するかもしれません。また、この 70 年以上の間自由とか民主主義を多くの国民が知っています。その様な市民社会はロシアや中国にはありません。また、これだけメディアが弾圧されても NGO や市民団体、その他のメディアがその問題を大きく取り上げている。このような動きがある限りは好き勝手にはできません。また欧米も懸念を示しています。例えば、ムスリムを虐殺したり国外に追放したらインドの信用が地に落ちます。ここまではできないと思うし、制度上も司法も絶対に許さないと思います。インドは独裁を許すような制度は許容しない社会であるしそうした制度は確立しています。ただ国民の雰囲気としてヒンドゥー至上主義を歓迎するような雰囲気がかなり広がっていることは懸念すべき点です。ただ、最終の世論調査ではインド国民の 50%が今インドの民主主義が危機だと感じていると答えているので希望が持てる要素だと思います。

伊藤　融（いとう　とおる）先生のプロフィール

防衛大学校人文社会科学群国際関係学科　教授

経歴

- 中央大学大学院法学研究科政治学専攻博士課程後期単位取得退学
- 広島大学にて博士（学術）取得
- 在インド日本国大使館専門調査員
- 島根大学法文学部准教授を経て 2009 年より防衛大学校に勤務
- 2021 年 4 月より現職。専門は国際政治学
  特に現代のインド外交・安全保障問題、南アジアの国際関係について詳しく
  メディアの取材に数多く応じている。
- 笹川平和財団国際情報ネットワーク分析 IINA に定期的に論稿を寄稿

主な著書

『新興大国インドの行動原理-独自リアリズム外交のゆくえ』慶應義塾大学出版会　2020 年
『インドの正体「未来の大国」の虚と実』中公新書ラクレ　2023 年 10 月 25 日
『現代日印関係入門』東京大学出版会　2017 年
『現代インド３深化するデモクラシー』東京大学出版会　2015 年
『現代インドの国際関係−メジャー・パワーへの模索』アジア経済研究所　2012 年
『軍事大国化するインド』亜紀書房　2010 年
その他日本語、英語での多数の共著書、学術雑誌掲載論文がある。